

“ねばならない”の外を知る

「働く」に自分らしさを重ねた

6人の選択

知らないうちに固定化された「働く」のあり方や考え方。
そんな“ねばならない”から、意識的に一步踏み出した人々の想い、そして葛藤を知ること
もう一度「働く」ことについて考えてみませんか？



起業も進路も
「やりたい」が少しでもあれば、
可能性は無理に切り捨てない



伊藤瑛加さん

(株) Sunshine Delight代表取締役社長

いとう・えいか ● 東京都出身。中央大学法学部在学中。中央大学附属高校2年生のときに授業の一環で参加した「高校生ビジネスプラン・グランプリ」(日本政策金融公庫)でベスト100企画に選ばれる。その後、JAグループの「JA アクセラレーター」で特別賞を受賞。(株) Sunshine Delightを設立し、代表取締役社長となる。子ども向け日焼け止めクリームをKOSÉと共同開発。保育園等でのモニタリングを経て、本格的な事業化に向けて奔走中。

高

校生のときに起業し、現在は大学で学びながらビジネスを続けています。きっかけは、高校2年生のときに受けた「アントレプレナーシップ(起業家精神)入門」の授業でした。それまでは起業なんて考えたこともなかったのですが、ビジネスを通じて課題解決ができることを知り、自分が感じてきた課題も解決できるかも…と思ったんです。その課題というのが、紫外線による肌のトラブルでした。私の実家は兼業農家で、屋外で作業を続けてきた母はシミやシワが多く

て。子どもの頃から、どうしてなんだろう、どうにかならないのかな…と思っていました。

WHOや環境省の発信などを調べていくうちに、「生涯に浴びる紫外線の半分は18歳までに浴びるといわれている」「子ども時代の日焼けは後年の皮膚がんや白内障発症のリスクを高める要因になり得る」など、知らなかった情報にたくさん出会いました。日本では子どもが日焼け止めを使用する習慣はあまり定着していませんし、日焼け止めの使用を禁止している学校もあります。幼児期から啓蒙しないと変わらないと



考え、教材とセットで子ども向けの日焼け止めを販売するというビジネスを考案しました。

授業で起業のプロセスを実践し、“やってみよう精神”が鍛えられていた私は、両親の勧めもあってJAグループ主催のオープンイノベーションプログラムに応募。ビジネスプランを見てもらったり推薦状を書いていただいたりと、学校の先生方にも協力していただき、特別賞を受賞しました。その後、TOKYO創業ステーションなどのサポートを受けながら、「太陽の下で安心して暮らせる環境を」をコンセプトに、株式会社Sunshine Delightを設立しました。周囲のみんなが応援してくれる環境だったので、やりたい熱量がすごく大きくなっていて、「起業しない」という選択肢はなかったですね。

商品は、化粧品メーカーのKOSÉと共同開発しました。同社主催の「Innovation Program」に応募したところ、86社の中から採択され、協業の機会をいただいたんです。肌に優しいのはもちろん、子どもでも使いやすいポンプ式、環境に配慮した紙パック素材の使用、保育園などの施設で使いやすい大容量タイプなど、これまでの日焼け止めにはなか

った視点で作っていきました。一方、教材の制作についても、外部の方々と協力しながら進めていきました。いろんな人に協力してもらいながら一つひとつかたちになっていくのが、楽しくてたまりませんでした。

実は、起業する前から弁護士になりたいという夢もあったんです。進路をどちらかに決める必要はまだないと思い、大学では法律の勉強をして、弁護士になる道も残してきました。最近では会社の方が忙しくなってきたので、学生という立場や若さが武器になる今は、そのメリットを活かして事業に集中しようと決めました。でも、将来的には弁護士を目指すことも十分にあり得ると思っています。実際のビジネスを通して法律の知識が身につくこともあるでしょうし、起業や経営の経験が無駄になることはありませんから。進路って選択肢を切り捨てながら絞り込んでいくイメージがあるかもしれませんが、やりたい気持ちが少しでもあるなら、可能性を残したままでもいいんじゃないかと思うんです。あくまでも、今のタイミングではこれがメイン、というだけ。ガチガチに決めてしまわなくていい。そう思っています。

■伊藤さんのあゆみ

高校2年生	高校で起業家教育を受け、ビジネスにより課題解決ができることを知る。
高校3年生(5月)	JAグループの「JAアクセラレーター」で特別賞を受賞。
高校3年生(7月)	(株)Sunshine Delightを設立。
高校3年生(12月)	KOSÉの「Innovation Program 2019」に採択。
大学1年生	保育園等での実証実験を実施。
大学2年生	事業の本格化に向け、当面はビジネスに集中することを決意。

「夫婦は一緒に暮らすもの」
そんな固定観念を脱し
二拠点生活継続中

池田佳乃子さん

(株)HAA 代表取締役

いけだ・かのこ ● 1988年大分県生まれ。青山学院大学卒業後、映画会社、広告代理店を経て2018年、一般社団法人別府市産業連携・協働プラットフォームB-biz LINKに転職。別府と東京との二拠点生活を始める。築80年の元湯治宿をコワーキングスペースにリノベーションするなど、鉄輪温泉でプランナーとして活動。2021年(株)HAAを設立。「日常生活に、深呼吸を届ける」をミッションに、湯治をコンセプトにした入浴剤などのブランドを展開。



別

府で育った私ですが、温泉文化になじむこともなく上京し、映画会社を経て広告代理店に勤めました。多忙だけどやりがいはそれ以上。憧れの業界で働く喜びもあり、理想のキャリアと思う一方、働き方や価値観は多様であることも感じてました。というのも変わり者だらけのシェアハウスに住んだことで、「世の中9時17時で働く

人ばかりではない」ことを知ったからです。

警察官を辞めて建築家になった男性もいました。彼からは「いつでも勉強し直せること」を学びました。お金には無頓着でしたが、好きなことに突き進む姿が魅力的で、多分根本は一緒。だから夫婦になったんです。性格は真逆だけど、互いを理解し尊重する。平行線だけど進む方向は一緒。そんな面倒な

夫婦ですから新居も、コミュニティづくりをコンセプトに掲げた少し変わった集合住宅を選びました。広場に面した1階は、自宅兼店舗にする決まりがあり、本業の傍ら小さな雑貨店を始めました。

そこで私に気持ちの変化が生じます。仕入れのため別府に通ううち、昔は気づかなかった故郷の魅力を知り、盛り上げるお手伝いをしたくなったんです。夫に相談したところ、「じゃあ、向こうで働いてみては。暮らさないと本当の良さはわからないよ」という返事。てっきり二人で移住するのかなと思っていたら、移り気な私の性格を知ってか、向こうにも拠点をつくり、行き来しながら一人でがんばれとのこと。「夫婦は一緒に暮らすもの」と思い込んでいた私は驚いた半面、「めっちゃラクだぞ」とも感じました(笑)。リズムの違う二人には適度な距離が必要なんです。

こうして、東京と別府を往復する(現在は2週間ずつ)二拠点生活が始まりました。新たな挑戦に不安もありましたが、なんとかなると思えたのは、20代を通して好きな仕事に打ち込んだ経験値や培ったスキルに自信があったから。当初は、湯治場再生と空き宿問題を解決すべく奔走しましたが、苦労は予想以上で、地元の人々と時間をかけて信頼を築いて



別府にある湯治場、鉄輪温泉を見下ろす高台にて。この湯けむりの風景が大好き(池田さん提供)。メインの写真は、東京の拠点となる自宅兼店舗にて、建築家である夫の石井航さんと。

いきました。私のような働き方は憧れだけでは難しく、覚悟かスキルか目的意識の一つくらいは必要なのかもしれません。

最初は理解されなかった二拠点生活ですが、コロナ禍で在宅勤務が普及することで納得されることが増えました。東京に根を張る夫も地域に溶け込み、隣人の子の保育園の送り迎えを手伝うなど近所付き合いを楽しんでいます。「夫婦だけが家族じゃない」。私たちに合った暮らし方だと思っています。つらかったとき夫から「3年やれば見えるものがある」と励まされ、本当に3年目、一生をかけたいと思える会社を設立することができました。その第一弾として、別府の魅力が詰まった入浴剤を販売しています。多くの経験を積み重ねた今、自分たちが本当に心地良いと思える働き方を手にしています。

■ 池田さんのあゆみ

- | | |
|-----|--|
| 22歳 | 青山学院大学卒業後、映画会社に就職。6年間勤めたのち大手広告代理店に転職。 |
| 29歳 | 結婚。会社勤務の傍ら、集合住宅で自宅を兼ねた小規模な雑貨店を夫婦で開業。 |
| 30歳 | 別府市産業連携・協働プラットフォームB-biz LINKに転職し、二拠点生活開始 |
| 33歳 | (株)HAA設立。社名の由来は湯船に浸かったとき自然と出る「は〜」から。 |

対談

清水美春さん

大学院生(元・高校 保健体育科教員)

しみず・みはる ●1980年滋賀県生まれ。中京大学体育学部卒業。滋賀県の公立高校教員として進学校、夜間定時制、県教委事務局(競技力向上対策本部)勤務後、教員歴19年で退職。現職中に青年海外協力隊に参加しケニアの地方病院で2年間活動。現地中高生2000人以上にエイズ予防講座を届けた。帰国後もライフワークとして性教育や異文化理解などの講演活動を行う。現在は立命館大学大学院先端総合学術研究科に在籍。1万人の高校生に Condom を配る「びわこ condom プロジェクト」を全国で展開。

田中光夫先生

フリーランスティーチャー

たなか・みつお ●1978年北海道生まれ。東京都の公立小学校で14年間勤務するなか、病休、産休、育休代替講師不足による長期担任不在学級の多さを目の当たりにし、自身のキャリアを活かせないか考えた末退職。2016年よりフリーランスティーチャーと名乗り、SNSなどを通じた募集で、現在までに公立・私立小学校11校で代替学級担任を務める。2018年NPO法人 Growmate 理事として、半年間マーシャル諸島共和国でボランティア活動に従事。私設図書館の設計・施工を行う。

取材・文／堀水潤一

田中 清水さんは、県立高校の教員時代や教育委員会にいるときも、性感染症予防を訴えて各地の中学や高校を講演して回っていたんですね。「コンドームの伝道師」の名で紹介されている記事を読み、こんな攻めた活動をする高校教員がいるのか、とびっくりしました。

清水 驚かせてすみません(笑)。でもそれ

て保健体育の教員としての本業ではなく、仕事の合間の個人的な使命というか趣味の活動なんです。それに、記事ではコンドームの実習ばかりクローズアップされますが、アフリカの実情やパートナーとの関係性などの話にも時間を割いてるんですよ。もっとも、性教育に関心がない層にもメッセージが届くのはあり

助けを必要とする学級の力に。
その近道がフリーランスという選択(田中)

性教育をはじめ学校のタブーの
多くは思い込みから生じたもの(清水)



がたいですが。田中先生は「フリーランスティーチャー」と名乗られています。きっかけは何だったのでしょうか？

田中 以前勤めていた小学校で、学級経営がうまくいかないことに悩んだ同僚が病気休業したんです。代わりに来た講師も技量不足で辞めてしまい、穴を埋めるのが大変でした。この問題は根深いのですが、少なくとも自分がフリーランスになれば困っている学級をすぐに助けられると考え、公務員を辞めたんです。フリーランスティーチャーと名乗ったのは、時間講師と何が違うか考えたとき、経験やスキルを活かし、助けが必要な場に颯爽と登場するイメージがわいたからです。お陰で、興味をもつ人が増え、問題意識が共有されたことは良かったです。僕の場合、やりたい仕事・やるべき仕事と、そうでない業務の折り合いがつかず組織の外に出たのですが、清水さんは組織の中で、したいことを貫いてきたんですね。

清水 私は「仕事は仕事」と割り切って、どんな業務も最大限の力を発揮しようとするタイプですが、同時にどうしたら楽しくなるかも常に考えるため、時々「これは好きかも」と思えることに出合います。エイズなどの性感染症に対する興味もその一つでした。教科書をなぞるだけでなく、渦中のアフリカでは何が起きてる

のか確かめたくなり、青年海外協力隊に参加したのが、今の活動の始まりです。

田中 僕もフリーになってから、マーシャル諸島に図書館を建てる活動に半年間従事しましたが、2年間休職してケニアに滞在するバイタリティはすごいですね。

清水 現職教員対象の制度があり、毎年何十人も参加者がいるんです。そのなかに私と同じく、「妹が出産し、孫を待望する親のプレッシャーから解放されたことで今回決断できた」と話す同年代の女性の先生が複数いました。人の生き方や働き方って、こうした見えない力にも制約を受けているんだなと実感しました。

田中 わかります。自分は長男ですが、妹家族が地元に残っているお陰で、東京で自由にやらせてもらっています。その東京、特に小学校では代替教員としての講師が不足しています。つまり僕にとって売り手市場なのですが、もし複数の学校から請われたら、敢えて、よりしんどそうなところを選ぶようにしています。

清水 そこが素晴らしいですね。私も帰国後、希望が通り夜間定時制課程の高校に勤務しました。ケニアで多くの社会問題に触れたことで、困難な状況に置かれた子と関わりたかったからです。以前いた進学校では規範を重んじる教師でしたが、随分アプローチも変

■ 清水さんのあゆみ

22歳	大学卒業後、滋賀県立彦根東高校(全日制)着任。部活動に注力するバスケットボール三昧の日々。
30歳	青年海外協力隊員としてケニアのHIV感染者ケアセンターに派遣。現地学校で予防講座を実施。
32歳	高校教員に復帰し、夜間定時制、県教委事務局勤務の傍ら、県内高校を中心に講演活動を実施。
41歳	退職。人文科学系の大学院に入学し、セクシュアルプレジャー(性的快楽)について研究。

りました。今は教職を辞し、大学院で文化人類学や哲学を学びながら性愛について研究しています。金銭面含めて不安はありますが、少なくとも2年は、やりたいことをし、自分の人生に余白をもとうとしています。

田中 思い切った決断ですね。僕の場合、確かに公務員時代と比べ収入はかなり減りましたが、お金で時間を買ったと思っています。自由な時間ができたことで、講師の仕事に加え、マーシャル諸島でのボランティアのほか、イラストまで手掛けた教育書の執筆や、SNSを通じた全国の仲間とのつながり、それに趣味も含めワクワクできることが次々と可能になりました。けれど何より嬉しいのは、「助かった」と喜ぶ先生方を見ることです。本当に困っている小学校が多いので。

清水 海外で感じたのは、日本の先生は総じて能力も高く真面目なこと。時間の余裕さえあれば、田中先生のように面白いことに挑戦したり、学んだりできると思うんですが、現実には休む暇がありません。働き方改革全般にいえますが、効率化はものすごく叫ぶのに、それによって生じた時間を何に活用するかというポジティブな議論になりづらいのが残念です。

田中 ですね。働く理由を問うと「老後のため」と返ってくることがあります。それもわかります

が、より大事なものは目の前の時間。「今」この時に、自分は何をするべきか、教師ももっと自己選択してよいのではないのでしょうか。荒れた学級に行くと、ルールで縛られてきた児童が多いんです。そこでまず、やりたいことを聞き、「いいね、やってみようか。何からやる?」と水を向けると一気に目が輝きます。子どもにとっても、教師にとっても、自己選択・自己決定が、自己肯定感を高めるというのは本当だと思います。

清水 教育界には多くの壁やタブーや違和感がありますが、私なりに手探りでトントンと叩いてきたところ、案外壊れたんですよ。タブーに切り込む性教育も、生徒たちの真剣なまなざしが教員の価値観に変化をもたらしています。全国の高校生にオリジナルキャラのコンドームを配布するクラウドファンディングを始めた際も、大勢の教育関係者が賛同してくれました。実は思ってるほど「ねばならない」の壁って少ない。あるとすればマインドセットの問題。心持ちとか固定観念です。ただ、それがなかなか手強い。そんなこともあり、やり残したことはないか自問自答を繰り返した末、飛び出すことにしたんです。内部からだ時間がかかることでも、外からアプローチすれば大きく変わることもある。そんなことを期待しています。

■ 田中先生のあゆみ

24歳	大学入学後も就きたい仕事が決まらず、教育学部に転部した末、東京都の公立小学校教員に。
33歳	病休の同僚の代わりが見つからず苦労したことを契機に代替教員不足等の問題意識が芽生える。
38歳	教員生活14年目で退職。フリーランスティーチャーとして活動開始。初年度4校の講師に。
40歳	マーシャル諸島共和国にて半年間、私設図書館建設ボランティアに従事するなど多方面で活動。



有坂 罌^{さん}

移動映画館「キノ・イグルー」

ありさか・るい ● 2003年に移動映画館「キノ・イグルー」を渡辺順也氏と共にスタート。東京を中心に全国各地のカフェ、雑貨店、書店、ベーカリー、美術館、公園などさまざまな空間で映画上映イベントを開催。その場所がもつ空気感を大事にした、唯一無二のシネマ体験を提供している。映画カウンセリング「あなたのために映画をえらびます」、インスタグラムで日々発信する「ねおきシネマ」など、既存の枠にとらわれず自由な発想で映画の楽しさを伝えている。

長年続けた
サッカーへの未練は皆無。
自分が一番楽しいと
思えることを

19

歳までは映画を2本しか観たことがなかったんです。小学2年生のときに『ダーニーズ』を観て夢中になり、もう一度観たいと親に頼んだのですが、観に行ったのは別の映画で…。当時の僕は幻滅

してしまい、それ以来、映画を毛嫌いするようになりました。再び映画を観るようになったのは、『クール・ランニング』がきっかけです。誘われてしぶしぶ観に行ったんですが、大爆笑からの最後は号泣で、そこから映画の魅



力に取り憑かれてしまいました。

僕はずっとサッカーをやっていて、ちょうど映画にハマりだしたころ、プロを目指してサッカーの専門学校に進学しました。練習や授業の合間に映画を観たり映画関連の本を読んだりしていましたが、その道に進もうとはまったく考えていませんでした。その後、プロテストを受けたものの、契約には至らず。指導者という道にも心が動きませんでした。サッカーひと筋だったので、ほかに何もない。どうしようかなと思ったときに、あ、映画の近くにいたい…と思ったんです。そこで、レンタルビデオ店でアルバイトを始めました。

長く続けてきたサッカーをすっぱりやめて映画の世界に踏み出したわけですが、迷いは一切ありませんでした。幼いころから母に「好きなことを見つけてとことんやりなさい」と言われて育ったのが大きいと思います。映画という好きなことを見つけたんだから、こっちに進むしかないなど。自分が一番楽しいと思えることを選択するっていうのは、僕にとってはとても大事な価値観なんです。自分が決めたことであれば、後悔もしませんから。

バイト生活は5年ほど続いたのですが、とに

かく映画の陳列棚づくりが楽しくて。映画好きが集まる活気ある職場でした。そのうちに自分が好きな映画を上映する自主上映会をしたいと思うようになり、そう口にしていたら、映画館を所有する友人から「うちでやりなよ」と誘われて。それが移動映画館「キノ・イグルー」としての初めての上映会です。次第にカフェやギャラリーの方からも相談を受けるようになりました。すべての上映会がオーダーメイド、オフアールがあればどこへでも…というのは、当ても今も変わりません。毎回、まっさらな気持ちでまっさらな状態からつくるようにしています。培ってきた経験は確かに大事なものだけど、そこに胡座をかきたくはなくて。縁あって出会った方々と、映画に詳しい人・詳しくない人、経験がある人・ない人という関係性にはなりたくないんです。

どんな仕事も、楽しいと心が動く瞬間がないと、続けるのは難しいと思います。なぜなら、“働く”は“生きる”の一部だから。いろんな情報や多様な価値観があふれる今の時代だからこそ、自分はどうか、どう生きたいのか、自分に矢印を向けることがとても大事なんじゃないかと思っています。

■有坂さんのあゆみ

小中高	一卵性双生児の兄と共にサッカー三昧の日々を送る。
19歳	プロサッカー選手を目指して専門学校に進学。
21歳	プロテストを受けるも契約に至らず、レンタルビデオ店でアルバイトを開始。
28歳	移動映画館「キノ・イグルー」をスタート。個人事業主として活動する。



最短距離で
夢を叶えられなかったからこそ
できた経験が、
今の自分をつくっている

@ceu0116
@ceu_wedding
@ceu.tokyo

服部由紀子さん

ヘアメイクアップアーティスト

はっとり・ゆきこ ●ヘアメイクアップアーティスト。CEU株式会社代表取締役。全国から指名のみでウェディングヘアメイクの依頼を受け、2年先の予約も入るほどの人気ぶり。アクセサリーの制作・プロデュース、美容師向けヘアメイク講師、ファッションショーのヘアメイク監修なども務める。著書に『どうせ24時間 印象に残る女になれ』（角川書店）。

目標を決めたら、そこに辿り着くためには何をやるべきかを考え、あとはひたすら努力する。そんな生き方をしてきました。仕事についても、高校時代から「ヘアメイクアップアーティストになる」と目標を決めていました。ただ、両親からは大学だけは出ておいてほしいと強く言われて、美容専門学校には進学できませんでした。学

費を出すのは親なので、まあ従うしかないなという感じで。でも、専門学校に行くだけじゃ道じゃないので、それがダメなら他の道を探そうと、気持ちはブレませんでしたね。遠回りすることに焦りはありましたが、今振り返ると、焦りがあったからこそよりがんばれたんだと思います。環境が整っていないほうが、人って工夫したり試行錯誤したりして成長しますから。

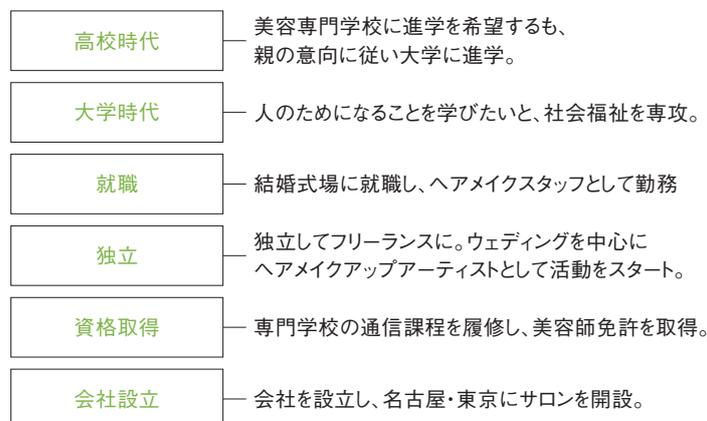
大学では社会福祉を学びました。社会福祉と美容とを掛け合わせて何かしたいと考えて、顔に損傷を受けた方への特殊メイクや皮膚再生に興味をもった時期もありました。写真館で手伝いをしたことをきっかけにウェディングに興味をもち、卒業後は結婚式場に就職。当時は美容師資格がなくてもヘアメイクができたので、ヘアメイクスタッフとして勤務していました。新郎新婦やご家族をサポートする立場になり気づいたのが、ウェディングと福祉の共通点です。相手は何を求めているのか、どうしたら喜んでもらえるか…を考えて支援するというのは、まさに福祉の考え方なんですよね。お客さまに寄り添いながら提案するという私のスタイルは、このときから変わりません。

2年ほど式場に勤めたのち独立し、その後、専門学校の通信課程を履修して美容師免許を取得しました。ヘアメイクの技術や知識は自己流で身につけていたのですが、時代の流れもあり、取得しておこうと思ったんです。その頃からは幸いにもどんどん評判が広がり、

名前を知っていただけるようになりました。以前は、ウェディングのヘアメイクって、下に見られがちだったんです。お客さまの要望に応えるだけで、表現力や発想力は求められない…という印象が少なからずありました。でも私はそうじゃないとっていて、相手の希望を聞いたうえで、自分から提案していったんです。ウェディングでは使わないようなアクセサリや流行のメイクを取り入れたりして。これがすごく反響があって、ウェディングのヘアメイク業界のトレンドが変わっていくのを肌で感じました。

最短距離で夢を叶えられなかったからこそ、今の自分があると思っています。私のなかに「諦める」という選択肢がなかったのは、やりたいこと、なりたい自分があるなら、実現するしかないと思ってきたから。いつか死ぬなら、やりたいことに情熱を傾けたい、思いっきり楽しみたい、自分で決めたことに誇りをもちたい、結果を出して一流になりたい…って。今も日々そう思って、全力で生きています。

■ 服部さんのあゆみ





身を置く「環境」を
最大限活用、
できることをする!!
伊藤瑛加

伊藤瑛加さん

高校、大学、企業…あり方は違えど、「この課題を解決したい」や「学びたい」は熱意があれば年齢や立場など関係なく実現できるチャンス! サポートを活用し、いろいろな自分に出会いたいです。



経験を積み重ねる中で
自分の「心地良さ」を
知り、行動力すること。
池田佳乃子

池田佳乃子さん

シェアハウスに住んだり、転職したり、結婚して二拠点生活してみたり…行動していくと自分の「心地良い」が見えてくるので、「心地良さ」を確かめる旅みたいな感じです。

「ねばならない」と向き合った6人に聞いた あなたにとって、 「自分らしく働く」とは?

違和感を
ポジティブな行動で
表現し続けること
清水美春



清水美春さん

たくさんの「なんでこうなんだろう」を無視できない性格なので、違和感を受け流さずに、ポジティブにアプローチし続けることだと思っています。

常にわくわくする
場所を目指し
続けること
田中光夫



田中光夫先生

困難な学級であるほど「よし、やってやるぞ!」と立ち向かえる。どんな状況でも悲観せず楽しんで取り組むことで、結果的に全員がハッピーな学校を増やしていきたいです。

矢印を
心に向けておく
有坂 壘



有坂 壘さん

「働く」は「生きる」の一部。なので過去や周囲ではなく、常に「自分」に矢印を向けて、やりたいこと・興味があることに素直になることが大事なんじゃないかと思っています。

自分の決断に
誇りを持って、
継続を重ねた結果
仕事への情熱を
忘れずに!!
服部由紀子



服部由紀子さん

たくさんいるヘアメイクの中から私を見つけ、選んでくださるお客様に恥じないよう、自分がこれまでしてきた決断に誇りと情熱をもって、これからもお客様に寄り添っていきたいです!